心肺蘇生法に神様は必要か？

「……初めまして。私は冥府から来ました」

　取り敢えず、俺達は向かい合って床に正座していた。だが、この妖精のような奴は、少し突っ慳貪な言い方で話し始める。俺に目を合わせようともしない。どうやら、さっきのアレのせいで、機嫌が悪いようだ。まぁ、ちょっとやり過ぎたかなと今は少しだけ反省している。

　それは、とある生物の体液でシミがついた服が雄弁に語っていた。

「……」

「……」

「……で？」

「はい？」

　冥府から来たという、この妖精のようなやつは、首を傾げる。

　いや、それで終わりじゃ無いだろう。

「名前は？」

「名前？」

　なんの事だと言わんばかりに疑問符を付ける妖精のような奴……ええい面倒くさいから、いっそ『妖精モドキ』でいいか。

「お前の名前はなんだ？」

　嫌な予感はするが、もう一度俺はこの妖精モドキに尋ねる。

　だが、こいつは予感を裏切らなかった。

「そんな物ありませんが？」

　それを聞いて、俺は再び絶句する。こんな形でも人間っちゃ人間だ。当然名前くらいは持っているものだと思っていた。一体こいつは何者なのだろうか？

「……なら、俺はお前の事を何と呼べばいい？」

「……そうですねぇ、何でもいいです。お好きなようにお呼びしていただいて構いません」

　ようやく動くようになった口で聞いた答えが、これだ。俺は頭を抱えそうになるが、溜息を吐くだけにとどめる。

「……おい、妖精モドキ」

「……どういう意味かは存じ上げませんが、何か失礼な呼び方では？」

「そんなことは無い。それよりも、お前が冥府とやらから来たのは分かったが、その『冥府』ってなんだ？」

　一応『冥府』が何なのかは、本で読んだことがあるので知っている。確か『死後の世界』のことだったはずだ。だが、現実にそんなものは存在しない。あんな物は、ただの作り話である。

　だから、妖精モドキが「自分は冥府から来た」と言った時には、少しだけ興味をそそられた。普通なら一笑に付すところだが、目の前にいるのがこんな奴なので、信憑性があると思ったのだ。

「『冥府』が何か、ですか。まぁ簡単に言えば、この世界で生きる生物が死んだ後に来る世界のことでしょうか？」

　一応、自分の知識が正しいかどうか分からないので、まずはそこから確認してみたところ、そんな返答が来た。どうやら、俺の想像している物と、大体一緒らしい。まぁここで間違っていたとしたら、それはそれで話についていくのが大変なので、一致していて良かった。

「で、私はその冥府にある王宮の、管理人をやっています。正確には、管理人の一人を、ですが」

　妖精モドキが説明を続ける。

「ふーん。で？　その『冥府の王宮』の管理人とやらが、一体全体俺に何の用だ？　何故俺の跡をつけてきた？」

　他に気になることもあったが、取り敢えず本題に入る。ぶっちゃけ、ここが一番聞きたいところだ。こいつが『冥府の王宮の管理人』だったとしても、それは俺の跡をつける理由にはならない。

　いや、まぁ、その理由も大体想像がつくのだが。

　何故か言いづらそうにしている妖精モドキを見て、俺は自分の予想を言ってみた。

「あれか？　あの光か？」

「あ……はい」

　どこかバツの悪そうな顔をして、妖精モドキは頷く。ここでようやく、こいつは今まで逸らしていた目を俺に真っ直ぐ向けた。よく見れば、実に綺麗な黒い瞳をしている。

　こうして見ると、女性っぽいな、こいつ。

「あ……あの……」

「ん？」

「あなたに、お話しなければならないことがあります」

　急に改まって、この妖精モドキはそう言った。いや、今までも丁寧語だったが、さっきまでの突っ慳貪さが無い、と言うのだろうか。ちゃんとこちらに敬意を払っている、そんな感じがした。そんな妖精モドキの様子に、俺の背筋も自然と真っ直ぐになる。

　こいつの話を整理すると、次のようになる。

　どうやら、あの光から出てきた奴に吹っ飛ばされた俺は、死んでしまったそうだ。最初は耳を疑ったが、どうやら事実らしい。何かにぶつかったのは覚えているが、まさか人だとは思っていなかったし、それにぶつかったのだとしても気絶していたのかと思っていた。

　だが、言われてみると、気絶……いや、死ぬ直前に、誰かの声を聞いた気がする。そういえば、何かにぶつかった割には、あの路地の周辺にそれっぽいものは落ちていなかった。

　で、運悪く俺を殺してしまった奴――そいつについては、この妖精モドキは『護衛を任されている人』という事以外、何も教えてくれなかったのだが――は、それを見て尋常じゃないほどショックを受けたそうだ。まぁ、当然だろう。寧ろ正気を失わなかっただけ凄いと思う。よくショックを受けただけにとどまったものだ。

　で、俺が今何で生きているのか、と言うと、そいつは妖精モドキと色々話しているうちに、何を思ったのか、俺の胸に両手の平を押し付けたそうだ。すると黒い光が俺とそいつを包み込み、そいつは消えてしまい、俺は生き返った、ということらしい。

　なるほど。俺が死んでいたこと以外、さっぱり分からん。

「私にも分かりません……」

　落胆したように俯く妖精モドキ。だが、もう一度俺を見上げて姿勢を正すと、そのままゆっくりと頭を下げた。

「この度は誠に申し訳ありませんでした」

　さっきの出来事から、まさか謝罪されるとは思っていなかった俺は、何と言っていいか分からず目を泳がせた。

　そんな俺に構わず、妖精モドキは言葉を続ける。

「謝って済む問題では無いと重々承知しておりますが、しかし――」

「あー……気にするな。今俺は生きているんだろう？」

　このまま謝罪を聞くのは、何か申し訳ない気がしてきた俺は、妖精モドキの話を途中で遮る。別に怒っているわけじゃ無いのは事実なのだ。というか、言われなければ死んだ事すら知らなかった。

　俺の質問に、妖精モドキが頷く。なら、それでいい。

「で……話はそれだけか？」

「えー……」

　何となく居心地が悪くなったので、話をさっさと切り上げようと俺が尋ねる。すると、今度は妖精モドキが目を泳がせ始めた。

　おや？

「おい。どうした？」

「あの……厚かましい事であるのは分かっているのですが」

　その瞬間、ふと俺の背中に、嫌な汗が走る。

「おい……まさか……？」

「はい」

　妖精モドキは、弱々しく微笑むと、コクンと首を縦に振った。

「私と一緒に、その人を探してはいただけないでしょうか？」

「……はい？」

　間抜けな声が、俺の部屋に響いた。